

No. 59

2014.12

世田谷文学館 ニュース

SETAGAYA LITERARY MUSEUM

館長の作家対談
角田光代（小説家）



収藏品のご紹介

石川淳『諸国崎人傳』原稿

2013(平成25)年度の収藏品について

岡崎京子『pink』(1989) 表紙原画 ©岡崎京子/マガジンハウス

館長の作家対談

ゲスト
角田光代
(小説家)聞き手
菅野昭正
(世田谷文学館館長)

『空中庭園』『対岸の彼女』『紙の月』など話題作、問題作を次々と発表し、先ごろ、『八日目の蟬』がスペインとイタリアで翻訳出版されたばかりの角田光代さんをお迎えし、当館館長がお話を伺いました。

スランプの時期

館長▶角田さんはデビューされたのは1990年ですか。

角田▶90年デビューです。

館長▶海燕新人文芸賞ですね。

角田▶はい。

館長▶「幸福な遊戯」ですね。

角田▶そうです。その後もいくつか「海燕」に小説を発表しましたが、あまり注目もされず、本も売れなかったのですが、新聞や文芸誌に書評が出るとうれしかったです。

館長▶私も書いた覚えがあります。「もう一つの扉」というのを覚えています。ルームメイトがいて、それとあまりうまくいっていない話。それから、UFOを好きな少年が出てくる、あれはなん

と言いましたっけ。

角田▶「まどろむ夜のUFO」です。

館長▶あれも書いた記憶があります。

角田▶はい、菅野さんにはいくつか書いていただいたのを覚えています。本当にうれしかったです。館長▶そうですか。そう言っていたけると、身に余る光栄です。

角田▶とんでもないですよ。

館長▶だいたい90年代前半ですね。それから、角田さんは児童文学も手がけておられるのですか？

角田▶二冊だけ書きました。(注▶「ぼくはきみのおにいさん」と『キッドナップ・ツアー』)

館長▶前から関心があつてお書きになったんですか。

角田▶いえ、全然。河出書房から児童文学のシリーズを出すから書いてくれと依頼されて出して、それを読んだ児童書の編集者が、もう一冊書いてくれというので書いたぐらいです。

館長▶児童文学をお書きになる時と、それから普通の小説というか、本来の仕事とどういうふうに

違うものですか。お書きになる姿勢というか、態度というか。あるいは手応えというか、いろいろな面で。

角田▶子ども向けの本は、やはり分かりやすく、話がちゃんと始まって終わるように気をつけて書いていましたね。児童文学は二冊書いて、もう無理だと思つて、やめました。

館長▶無理というのは難しいということですか？

角田▶難しかったですね。

館長▶いろいろな余分な神経を使うということもあるのでしょうか。でも、俗な言い方になるけれど、世評はそれなりに高かったんですね。

角田▶そうですね。児童文学の賞を頂いたので。

館長▶何をやっても立派にできるんだ。

角田▶そんなことはないですよ。全然ないです。児童文学を書かせていただいたり、その後、エンターテインメントのほうに行つたのは、結局純文学の雑誌で仕事が来なくなつたからなんです(笑)。

館長▶仕事が来なくなつたつて、いつ頃ですか。

角田▶1999年頃ですかね。2000年ぐらいかな。

角田▶そうですね。2000年の前半の頃だったと。

館長▶それまでの作品より、まず飛躍的に長くなりましたね。長篇になった。長篇はあれが初めてですか。

角田▶初めてです。

館長▶『空中庭園』はまず、同時代の団地の生活のイメージが非常にうまく小説化されていると思つて感心しました。表面的には、外から見たら破綻もない、普通の平均的な家族ですね。ところが、家族の、それぞれの視点が違つている。夫婦、娘と息子、それから夫の愛人、おばあちゃん、その六つの視点が合わさると、ひとつの家族の分裂の仕方というのですか、矛盾とか食い違いというのが自ずから出てくるようになってくるのですね。そういう方法に感心しました。

家族のことについては、『空中庭園』の前から、これこそ大事な主題として考えていたのですか。

角田▶そうですね。『空中庭園』の前までは、ずっとと家族といつても、疑似家族というか、一緒に暮

角田光代 (かくた・みつよ)

小説家。1967年神奈川県生まれ。早稲田大学第一文学部文芸専修卒業。90年「幸福な遊戯」で海燕新人文芸賞を受賞しデビュー。96年『まどろむ夜のUFO』で野間文芸新人賞、97年『ぼくはきみのおにいさん』で坪田譲治文学賞、『キッドナップ・ツアー』で99年産経児童出版文化賞フジテレビ賞、2000年路傍の石文学賞を受賞。03年『空中庭園』で婦人公論文芸賞、05年『対岸の彼女』で直木賞、06年「ロック母」で川端康成文学賞、07年『八日目の蟬』で中央公論文芸賞、11年『ツリーハウス』で伊藤整文学賞、12年『紙の月』で柴田錬三郎賞、『かなたの子』で泉鏡花文学賞、14年『私のなかの彼女』で河合草雄物語語賞を受賞。他に小説、エッセー多数。旅好きとしても知られている。

『筏の舟で海をわたる』
2014年、毎日新聞社『ツリーハウス』
2010年、文藝春秋『対岸の彼女』
2004年、文藝春秋『空中庭園』
2002年、文藝春秋

館長▶じゃあ、僕が時評なんかで書いたせいで、ということはないですね。

角田▶いえ、書いてくださったところは、まだよ

らしているけれど血のつながりはない家族を書いていたのですけれど、『空中庭園』でたぶん初めて、血のつながった家族を書いたと思います。

館長▶家族の問題は、小説をお書きになる以前から、関心を持っておられたことですか。

角田▶そうですね。デビュー作の『海燕』に応募した小説が、人は家族をつくつて、結局そこから出ていくのに、また新しい家族をつくるのはなぜなんだろうつて、20代の時考えていて、それがテーマだったんです。人はなんで家族をつくるのかというの、ずっと考えていました。

館長▶それは先行作品の影響とかそういうことはありますか。

角田▶ないですね。もうちよつと自分の内的な。

館長▶たとえば小島信夫さんの『抱擁家族』とか、一世代前の家族小説がありますね。『抱擁家族』なんかはお読みになったんですか。

角田▶はい。

館長▶その時の印象はどうでした？ 新鮮な感じがしたか、それともあまりご自分の家族経験とい

うのか、そういうものとは触れあ

わないとか。

角田▶そうですね。不思議な感覚を抱いて、その感覚が、自分とはリンクしなかつた。ちよつと遠いところにあつて、すごく不思議なものを読んだなという気持ちでした

ね。

館長▶あれは、ア

角田▶はい。書きなおしは最初からさせられていたので、とくになんとも思わずなおすんですけど、なおしてもどうしようもない、掲載できないと言われたときはやはりきつかったです。

館長▶書きなおせとか。

角田▶はい。書きなおしは最初からさせられていたので、とくになんとも思わずなおすんですけど、なおしてもどうしようもない、掲載できないと言われたときはやはりきつかったです。

館長▶書きなおせとか。

角田▶はい。書きなおしは最初からさせられていたので、とくになんとも思わずなおすんですけど、なおしてもどうしようもない、掲載できないと言われたときはやはりきつかったです。

館長▶書きなおせとか。

角田▶はい。書きなおしは最初からさせられていたので、とくになんとも思わずなおすんですけど、なおしてもどうしようもない、掲載できないと言われたときはやはりきつかったです。

館長▶書きなおせとか。

角田▶はい。書きなおしは最初からさせられていたので、とくになんとも思わずなおすんですけど、なおしてもどうしようもない、掲載できないと言われたときはやはりきつかったです。

館長▶書きなおせとか。

角田▶はい。書きなおしは最初からさせられていたので、とくになんとも思わずなおすんですけど、なおしてもどうしようもない、掲載できないと言われたときはやはりきつかったです。

館長▶書きなおせとか。

角田▶はい。書きなおしは最初からさせられていたので、とくになんとも思わずなおすんですけど、なおしてもどうしようもない、掲載できないと言われたときはやはりきつかったです。

館長▶書きなおせとか。

角田▶はい。書きなおしは最初からさせられていたので、とくになんとも思わずなおすんですけど、なおしてもどうしようもない、掲載できないと言われたときはやはりきつかったです。

館長▶書きなおせとか。

角田▶はい。書きなおしは最初からさせられていたので、とくになんとも思わずなおすんですけど、なおしてもどうしようもない、掲載できないと言われたときはやはりきつかったです。

から、かえってリアリティがなくなることもあるかもしれないね。

過去を書く場合、歴史的な事実を、小説の中心にするにせよ、背景にするにせよ、経験とか知識とかが不足して、そこが浮いてしまうということもあると思うのだけれど、角田さんはそのあたりの処理が上手だと思う。

角田▼すごく嬉しいです。

館長▼たとえば、『笹の舟で海をわたる』の場合は、学童疎開のことから始まりますね。学童疎開って、昭和19年の夏ぐらいから始まって、僕はもうちょっと年が上ですから経験がないのですけれど、いそこが学童疎開に行ったり、話を聞いたりして、だいたい見当がついています。今回、読んで、当時のイメージがリアルに浮かび上がってくるという感じは持ちました。その他にも、アポロ11号だとか、学園紛争だとか、赤軍派の立てこもりとか、二行、二行挿むと、そうすると小説の中の時代の移りゆきが、時間の推移ということを直接書かなくてもだいたい表現できる。その背景については、ずいぶん手間をかけて調べるんですね。

角田▼調べるんですね。

館長▼あの『ツリーハウス』の満州の話なんて、とても知識では書けないことですからね。

角田▼(笑)。でも、本当に大変でした。それまで勉強してこなかったんで、戦争がなぜ起きたかすら知らなかったんで、そうすると、太平洋戦争が起きる前に日本と中国で何があつたのかとか、もつと前の時代にさかのぼって勉強しなきゃいけないくて、子どもでも読めるような本で、人の何倍か勉強しなきゃいけないんですね。学生の時に勉強していれば、もうちょっと楽だったのかなと思いつながら勉強しましたけれど(笑)。

館長▼そういうことをお調べになるのは、主に書かれた資料ですか？

角田▼いえいえ(笑)。

40歳で初めて戦争に関心を持つ

館長▼『空中庭園』以来、角田さんは長篇を活発にお書きになつていて、どれも方法的にいろいろ考えておられると思いましたが、ご自分では、方法意識というか。今度このテーマを書くから、こういう方法でとか、内容と形式というか、方法と主題と言いますか、そういうことについてどうお考えになつているのでしょうか。

角田▼『空中庭園』の前が、スランプの輪から抜け出せない時で、その後、どうしようかというのは非常に自分にとって大きな問題だったので、『空中庭園』を書いて、ようやく「あ、別のことができた」という気持ちがあつたので、それからわりと方法を変えて書くようにはなりました。

館長▼『対岸の彼女』がその次ですか。

角田▼そうですね。

館長▼『対岸の彼女』では、現在の掃除代行会社と、それから過去の高校時代と交互に出しましたよね。

角田▼ええ。そうですね。二つを並べて、人物像がよりよく浮かび上がるように考えて。

館長▼角田さんの小説は、女性が二人出てくると、対照的な性格、気質の場合が多いでしょうか？

角田▼はい。

館長▼『対岸の彼女』の高校時代は葵さんとナナコさん。それから、現代の主婦は小夜子さん。小夜子さんと葵さんも対照的ですね。小夜子さんはどちらかといえば内向的、引つ込み思案、家庭の中に閉じこもる。葵さんは、開かれた、どんどん出ていく外向的な生き方をしている。それから、『笹の舟で海をわたる』の二人。

角田▼そうですね。左織と風美子ですね。

館長▼その二つの小説の場合が顕著にそういう形



角田▼そうですね。実際にそこに参加した人の昔の日記だとか、あとちょっとユニークだなと私が思うのは、今、自費出版される方が多いですね。資料を探していると、そういう素人の方が記念に出したような本が出てきたりするの。

館長▼ご自分の体験記ですね。

角田▼はい、そうですね。満州の生活記みたいなものも読んだりします。

館長▼引き揚げの小説はあるけれど、『ツリーハウス』のようにおじいさん、おばあさんが満州に行つて、いろいろ商売して、満州人と一緒に、中に溶け込んで暮らしたという小説はあまり読んだ記憶がない。みんな引き揚げの時の苦労話になっちゃうんですね。それをお調べになるのは大変だったろうなと思うし、それから現代の長春にもいらしたわけですね。

角田▼行きました。強行軍で2泊ぐらいで行つて。編集者が片言だけ中国語を話せるというので、ガイドもつけずに行つて、ただ街を見て、記念館を見てとか、それぐらいでした。

館長▼その時は長春だけですか。

角田▼長春とハルビン、あと大連も行きました。

館長▼連載の前に行かれたのですか。

角田▼連載中に。やはり見ないと、と思つて。

料理メニューで書ける男女の関係性

館長▼角田さんの小説を読んでいると、料理のお話、あるいは食べる描写がとても多いですね(笑)。

角田▼多いですよ(笑)。

館長▼女性の作家の小説つて、いい悪いは全然別の問題ですが、男の小説に比べると、飲み物、食べ物、料理をつくること、圧倒的にそういう描写が多いですね。

角田▼そうですね。



が出てきていますが、女性のいろいろな生き方という問題を考える上でそういう対照が効果的に作用するとお考えですか。

角田▼はい。女性が一昔前よりは、もうちょっと自由になつて、結婚しなくても仕事を続けていても、という女性が増えた一方で、やっぱりまだまだ結婚しなくては、結婚したら仕事を辞めなくてはと考えている女性がいる今という時代は、すごく面白いですね。今また、専業主婦願望の強い若い女性が多くなつたと新聞で読みましたが、時代の変化によつて、女性のあり方も変わるといふ点が興味深いです。

館長▼そういう女性を書いていて、どちらかに同情とか、共感とかお持ちなのか。そういうことはないんですか。

角田▼私はやはり外側に出て行くほうが好きだし、また私自身もどんどん自分で前に行こうって生きているはずだと思つていたんですけれども、最近よく分からなくなつて、自分で「こうしよう」と思っているのか、それとも違うのか。何かによつてそう思わされて動いているのかというの、よく分からなくなつてしまいました。館長▼そうすると、小説をお書きになるのに困りませんか(笑)。

角田▼(笑)。そうですね。でも、まだ大丈夫です。

館長▼これはやっぱり角田さんが、つくることが好き、食べることも好きなんですか。

角田▼つくるのを覚えたのは、結構年を取つてからなんですけれど、男性の書く小説を読んでいる、何を食べているかが知りたいんですね。こういう心境の時、いったい何を食べているんだろうと知りたいんです。どうしてメニューの名前を書いてくれないんだろうとつづつと思つていたので、それでわりと書くようになりました(笑)。

館長▼それは鋭い男性小説の批評ですね(笑)。ヨーロッパの小説つて、もう少し男でも食べるものを書きますよね。

角田▼そうですね。

館長▼ただ、食べるものを書くって、だいたい家庭の食事のことじゃなくて、どこかのレストランへ行ったりとか、そういうのになりがちですけどね。日本の男性の小説は、それすらもなく、飲まず食わずで生きているようなね。でも、女性の作家の中でも角田さんのは、少し平均より多いかな(笑)。どうでしょうかね。

角田▼多いですね。

館長▼それはご自分で、意識的にやつておられるんですか。

角田▼意識的に。男女の関係性を書く時に、どれほど親しいかとか、どれほどの遠慮があるかというの、いったいお店のメニューや値段、二人で食べているもので説明できると思っているところがあるんです。

館長▼そこまで僕は読めなかったな。駄目な読者(笑)。単にフライドポテトを食べたりしているわけじゃないんですね(笑)。

角田▼そうですね(笑)。同世代の人は分かるだろうな。ちよつと世代的な共有感覚に頼っているかもしれないですね。

館長▼そうですね。これは新しい読み方を教えていただいて(笑)。

展覧会のご案内

世田谷区内在住書家による 第34回 世田谷の書展

― 世田谷ゆかりの作家たち ―

2015年1月6日(火)〜21日(水)

1階文学サロン

現代書壇で活躍する書家36名が、会派を超えて「世田谷ゆかりの作家たち」をテーマに新作を一堂に披露する、世田谷の文学館ならではのユニークな書展です。

出展予定書家

(五十音順、敬称略)

荒谷大丘	安東 麟	池亀壽泉
石川昌亭	泉原壽巖	稲村雲洞
稲村龍谷	上田南郷	白倉仔龍
卯中恵美子	太川啓子	大根田照雲
川口青澄	菊地康博	久保田青松
久村拓司	黒田石鼓	小久保展代
後藤俊秋	小林早容子	椿 菖扇
師田久子	鈴木暁山	竹内青紗
田中榮子	坪西美枝	戸田幽翠
永井閑翠	野口白雲	服部葆竹
深田東穂	丸尾鎌使	村井虹城
安岡田鶴子	横山喜代子	渡邊鄧美子

観覧料〓無料

鑑賞講座

「書」の豊かな楽しみ方を探してみませんか。出品書家と鑑賞しながら、見どころや作品をわかりやすく解説します。芸術作品としての書を鑑賞して感性を磨きたい、書をこれから始めてみたいという初心者の方もお気軽に参加ください。

1月9日(金)	師田久子(日展会員)
10日(土)	泉原壽巖(日展会員)
11日(日)	川口青澄(読売書法会理事)
12日(月祝)	後藤俊秋(毎日書道展審査会員)
14日(水)	稲村龍谷(日展会友)
17日(土)	池亀壽泉(読売書法会理事)

各日14時〜15時、申込不要。直接当日会場にお越しください。

「岡崎京子展 戦場のガールズ・ライフ」

2015年1月24日(土)～3月31日(火)



『チワワちゃん』(1996)カバー原画 ©岡崎京子/KADOKAWA



『pink』(1989)扉原画 ©岡崎京子/マガジンハウス



『リバーズ・エッジ』(1994)カバー原画 ©岡崎京子/宝島社

男性誌を含む種々雑多なメディアに作品を掲載した岡崎京子ですが、その執筆の根底にあったのは、常に一人の少女を描くという、自身が愛読してきた少女マンガの世界に連なる意識であつたことが感じられます。しかし、彼女が果敢に描き続けたのは、女の子たちの夢や憧れを紡ぐ少女マンガとは対照的な、都市に生きる少女の日常、変容する家族像、高度資本主義下における女性の不安や欲望といった1980年代から90年代にかけての時代の現実でした。代表作となつた『リバーズ・エッジ』で、彼女はSF作家ウィリアム・ギブソンの詩の一節を借りて、次のように書いています。

平坦な戦場で
僕らが生き延びること

執筆を休止した90年代半ば以降も、彼女の作品に描かれた社会の流動化やグローバル化はますます進行しています。1994年の『リバーズ・エッジ』刊行から20年を経た今日、「平坦な戦場」にも似た世界の中で、私たちもまた生き延びることを余儀なくされている。本展は、彼女のこれまでの仕事を取り上げる初めての大規模な展覧会です。一人の少女マンガ家が見つめた時代とその行方を、彼女のほぼ全ての単行本原画をはじめ、学生時代のイラスト・スケッチ、80～90年代の時代を画した掲載誌の数々、また映画版『ヘルタースケルター』ほか関連の資料を通して見てゆきます。

*観覧料:12頁をご覧ください。

しかし1996年に不慮の交通事故に遭い、一命は取りとめたものの、現在はリハビリ中のため執筆活動を休止しています。この間も彼女の人気は衰えず、未刊作品の刊行や復刊が相次ぎ、『ヘルタースケルター』は2003年度文化庁メディア芸術祭・マンガ部門優秀賞、2004年には手塚治虫文化賞・マンガ大賞を受賞、そして2012年には同作が映画化されるなど、今も新たな読者を獲得し続

けています。
事故前に発表したテキストの中で、彼女は次のように書いています。
いつも一人の女の子のことを書くように思っている。いつも。たった二人の。一人ぼっちの。一人の女の子の落ちかたというものを。
——「ノート(ある日の)」より

せたがや版チルドレンズ・ミュージアムのできるまで

— せたがや子ども文学館の5年のあゆみ —

当館の子ども向け企画「ことばはくぶつかん」は、昨年、2013(平成25)年度にその役目を終えました。ここでは、その5年の歩みを中心に子ども向け事業を振り返ります。

「ことばの連続ワークショップ」
『ことばはくぶつかん』の始まり

当館の展覧会は、「不滅のヒーロー・ウルトラマン展」や「宮沢和史の世界」など、平成18年ごろから取り扱うテーマも多岐に渡り、これまでの「文学展」の枠を超える企画展を開催し始めました。展示手法も資料展示から、作家の思想や作品世界を体験できる空間<gt>を目指し始めたのです。

子ども事業でも、学校や家庭では体験できない内容で、従来の講座の範疇を超えた、実験的なプログラムを模索し始めました。〈ことば〉にまつわるプログラム「ことばはくぶつかん」(2009年開始)以下「ことば」の開発です。この講座は、同じ参加者が半年かけて4つのWS(ワークショップ、以下WSと表記)を体験することで、互いに協力し、ことばやコミュニケーションを中心に幅広く感性を育むことができるものです。初回の「ことばとしぐさ」では、落語をおして相手に気持ちを伝える「しぐさ」を学びます。その後、子どもたちが協力して巨大作品をつくる「ことばとびじゅつ」(写真1)、ダンサーとともに5感をとぎすます「ことばとからだ」(写真2)を体験します。最終回は、楽しく詩や短歌をつくる「ことばのことば」(写真3)に挑戦です。

子どものコミュニケーション不足が問われる現在、彼らが長期WSをおして人間関係を深め、他者と自己を肯定し、さらには、豊かな表現力を身に付けられるようにと始まった教育プログラムです。若手講師陣とスタッフは体あたりで、子どもたちと作り上げる



写真1:「ことばとびじゅつ」3日間連続(のべ18時間)協力しあえば、必ず仲良くなるものです。



写真3:「ことばのことば」連続WSの最終回。半年間の思い出を詩にして発表します。「子どもがなにごとに、積極的にになりました。」(保護者より)



写真2:「ことばとからだ」絵本や詩を身体で表現します。「子どもがよく笑うようになりました。学校では体験できないダイナミックなことを続けてください。」(保護者より)

WSに臨みました。2～3時間で終わる「過性のイベント」とは異なる。子ども一人ひとりの成長と向き合いながらの活動が始まったのです。

文学館で、「ワークショップ(WS)」?

ところで、「文学館」って何でしょう? 作家の個

人記念館ならば、歴史博物館の一つと言えるかもしれません。書籍や研究書を収集し閲覧できる場所だから、図書館や研究施設なのでしょうか。もちろん、資料を後世に伝える役割はあるでしょう。しかし、それだけではない。たぶんそこには、文芸を主とした芸術の力で、人びとが創造性を育むことができる「コミュニティ」としての役割もあるはずです。資料を収集展

示し、そこに集う人びととともにうみだす教育普及活動を実践する場。さらに、その活動範囲を、文芸に止めず、人の営みや心情、生き方すべてにかかわる活動ととらえたらどうなるでしょう。文学を「広義の文学(『アート』)」と捉えて、文学館活動を行ってみる。そんな「文学館」さしのひとつとして、「ことば」は生まれました。

文学館に、美術やダンスは関係ない考える方もおられます。しかし、参加者は子どもたちです。言語表現が苦手でも、造形・身体表現などの様々なコミュニケーション手段との関わりをとおして、長期間、同じ仲間で活動すること。その過程で、子どもたちは、こ

子どもたちとの時間

「こののは」を経験して2年目から、様々なことが見えてきました。回を重ねるごとに、子どもたちは自



写真4: 学校帰りに、筆洗いに参加する子。「将来、リーダーになるにはどうしたらいいの?」(小学4年生より)→現在彼は中学生。既に立派なリーダーです。

分を開放していきます。数時間のイベントならば、行儀よく自分を隠しとおすことができます。しかし、半年もメンバーが同じなのだから、喧嘩もすれば、仲直りもする。講座では、皆で仲良く昼食をとりますが、嫌いな食べ物がお弁当に入っていたら、さあ、大変。リーダーや仲間から完食を強いられる「食育の時間」となってしまう。つまり、子どもたちにとってWSは、特別なものではなく生活の一部になるのです。アートの日常化、ミュージアムの日常化です。講座開始前から来て、「一緒に準備を楽しんでくれる子。学校帰りに講座の後片付けや、筆洗いを手伝ってくれる子(写真4)」。近所で出会いがしに声かけてくれる子もいます。「こののは」を始めてから、そんな出来事が増えていきました。これは、地域の子どもたちにとって、当館が「身近な公共施設」になり始めた証しなのでしょう。「こののは」2年目は、子どもたちに当館が育てられた時間でした。私たちにあって、子ども一人ひとりの成長と向き合う、心構えができた期間でした。そしてこの頃から、私たちは、子ども向け事業の5年後、10年後を見据えるようになったのです。

スタッフとの時間

「ミッション・ビジョンの策定」

2年目の「こののは」継続とあわせて、スタッフはテーマ別討論の機会を持ちました。半年に及ぶ会議は、ロールプレイディベートゲームや、SWOT分析、クロス分析などを取り混ぜたWS形式でした。

第1回会議では、企画ごとの「現状と問題点の把握」を、ロールプレイディベートゲームで発表しました。異なる立場(参加者・保護者・学校・地域など)を演じわけ、現状提示と問題定義をおこなう行為(ロールプレイ)に、違う立場同士の論争(ディベート)を組み合わせる手法で、問題点を洗い出しました。

第2回会議では、子ども事業におけるミッション・ビジョンを策定しました(写真5)。「[ミッション]文化・

前の子どもたちの安全を自分たちだけで守れる備えを整えて、活動を開始したのでした。

『せたがや子ども文学館』の誕生

それまでの子ども向け事業の分類は、「学校向け」と「般向け」プログラムとに分かれていました。前者は「パネル出張展示」「移動文学館」や「学校連携」「学校読み聞かせボランティア養成講座」などの、アウトリーチを主とした事業で、後者は館内で実施する「こののは」や「さんぽ」展覧会関連講座です。それぞれの事業は、個別の職員が担当しており、ミッションの共有や、中長期ビジョンの確立が弱点となっていました。

ところで、「こののは」の特色は、「ことばとXX」といった、異種ものを掛け合わせること(クロス連携)で生まれる「相乗効果」です。全ての子ども事業に、この手法(クロス)をあてはめ、使命実現のために集まるスタッフ、あるいは、事業総体を『せたがや子ども文学館』ととらえるようになるでしょう? 「こののは」の手法(クロス)は、業務の変革をもたらしたのです。「こののは」開始の3年目には、個別事業の担当者の意識をこえ、「子ども文学館」に携わる者は、子どもにかかわる館内のあらゆる活動に、積極的にかかわっていき

ました。そして、すべてのスタッフと「子ども」をキーワードに調整をおこない、教育普及の枠を超えて、「子どもにやさしい文学館」を目指しました。「子どもにやさしい文学館」は、結果として「年配者にもやさしい」構造をうみ、バリアフリーのミュージアムとなるはずです。

例えば資料収集・保管の部門では、学校でも利用できる「子ども向けレプリカ」を作成し、アウトリーチで活用しました。また企画展やコレクション展では、子ども向け解説パネルやワークシートを開発し、展覧会の企画に子どもが携わったケースもありました。夏・春休み期間だけではない。いつでも子どもを受け入れられる環境を、文学館につくり上げることを目指していったのです。「こののは」が一つのWSから、スタッフのミッションへと変わったのです。

これからの『せたがや子ども文学館』

「こののは」は当初、新しいWSの手法の一つでした。しかし、その間に会った人々との連携やドラマから、〈子ども事業の哲学〉へと変化したのです。病気を持つ子、学校へ通うことが苦手な子、家庭環境が複雑な子……。いつでも、子どもたちを受け入れられる環境を、文学館につくり上げるには、どのようにしたらよいのか? 「こののは」を続ける中で、ミッション・ビジョンが明確になり、使命実現のため同志が集まり、ひとが変化していったのです。

〈子ども〉を大切に……。現在、私たちは、展覧会を開催するときに、子ども用の解説パネルやワークシートを設置することを特別なことと感じていません。最近では、解説パネルの点字化や、音声解説を試み始めています。

〈命〉を大切に……。ほとんどの職員が、救命救急資格を有し応急手当が出来るようになりました。ひとは、〈子どもと〉命を前にして、健全さを保たずにはいられません。大人が、大人らしく振舞うことができるのは、そこに〈子ども〉がいて、〈命〉の輝きに出会えるからです。〈子どもと〉命は、その究極さゆえに、ひとを導き、組織(社会)を活性化させます。

「こののは」という事業を作り上げるなかで、『せたがや子ども文学館』を立ち上げた今、「こののは」は一つの役目を終えました。「こののは」を果だった子どもたちは、立派な中高生となりました。これからは、子どもたちが自身がボランティアとして活動を企画し、年少者のケアを行うことができるプログラムに力を注いでいきます。子どもたちの自立活動へ地域社会が支えることができれば、ミッション・ビジョンが達成できます。(今年度の「野外活動」では、中高生と近隣大学生の皆さんが、ボランティア活動に参加し始めてくれました!)

『せたがや子ども文学館』は、イベントの総称ではありません。子どもたちが芸術活動や自然を通して、生きる力や人間性を育むプログラムのビジョンそのものです。(写真6)



写真6: 10〜70代までが、小学生をサポートする野外活動(「子ども探偵団」)。「昔の子どもと違って、今の子どもは年齢の違う子と遊ぶ機会がほとんどないよね。そういう意味でも貴重な場です。」(70代ボランティアより)

本年度より「こののは」はくぶつかん「移動文学館」「こども文学さんぽ」は、『せたがや子ども文学館』として再編成し、文化庁の支援対象事業となりました。

本事業開催にあたり、多くの方々と関係機関のご協力に感謝いたします。

協賛: 昭和信用金庫、世田谷信用金庫

助成: 平成26年度 文化庁地域と共働した美術館・歴史博物館創造活動支援事業

協力: 日本女子体育大学、日本女子体育大学ダンス・プロデュース研究部

芸術そして多様な体験をとおして、子どもたちの創造性や生きる力を育む。「ビジョン」地域や大人が支える中で、自由な創造性を持った子どもたちを育てる環境作り。

第3回会議では、ミッション・ビジョンを念頭にした「SWOT分析」を行いました。「S: 内部環境における強み strength」と「W: 内部環境における弱み weakness」、「O: 外部環境における機会 opportunity」と「T: 外部環境における脅威 threat」をそれぞれ考えました。

第4回会議以降では「SWOT分析表」をもとに、



写真5: 会議でビジョン(案)を説明するスタッフ。のべ40時間の会議で、5年分の活動方針をまとめました。

各事項を交差(クロス)することで、あらたな活動を考えしていきます。具体的プロジェクトの立案、既存事業への反映、5年間の事業再編立案は、この時期に行ったのです。

新企画「子ども文学さんぽ」

会議をとおして、「館周辺の良質な自然環境」や「近隣の山々へのアクセスの良さ」、あるいは「子どもの野外活動を、事業として受け入れられる館の運営方針」などが、当館の「強みであること」を自覚し、その戦略オブションの具体的事業の一つとして、企画「子ども文学さんぽ」(以下「さんぽ」が浮上しました。それは、子どもたちのニーズにも一致します。子どもたちへのヒアリングでよく耳にする、「どこか行きたい!」「ダイナミックなことをしたい!」といった冒険心は、男女を問わず、この世代の多くが抱えている夢です。毎回異なる場所、地域の民話や昔話にふれる野外活動のスタートです。「さんぽ」という新企画で、子どもたちが主体的に参加できる活動の場を提供し始めたのです。

「3・11」からの学び

しかし、企画開始直前の2011年3月に、東日本大震災が起こりました。当初は、宿泊を伴う内容まで視野に入れていた「さんぽ」に再検討が迫られました。開館時から区内子ども散歩講座を実施するなどの実績もあった事業でしたが、公共交通を含めたインフラ機能が停止した状況で、引率する子どもたちの安全を確保できるかを問い直したのです。館内では2009年から全臨時職員の救命救急訓練を継続し、緊急時に備えてきました。しかし、野外活動時の災害対策は別です。救急医療を迅速に受けられない状況下、傷病者の応急手当を施して搬送するのは自分たちです。安全は、全てに優先されます。最悪の状況下でも、目

企画展

水上勉のハローワーク 働くことと生きること

開催中～12月21日(日)
2階展示室

観覧料:
一般700(560)円
65歳以上・大学生500(400)円
障害者350(280)円
高校生以下無料
*()内は20名以上の団体割引

第34回
世田谷の書展
一世田谷ゆかりの作家たち—
2015年1月6日(火)～1月21日(水)
1階文学サロン 観覧料無料



水上勉(撮影:植野尚一)

岡崎京子展 戦場の ガールズ・ライフ

2015年1月24日(土)
～3月31日(火)
2階展示室

観覧料:
一般800(640)円
65歳以上・高校・大学生600(480)円
障害者400(320)円
小・中学生300(240)円
*()内は20名以上の団体割引



『ヘルタースケルター』(2003)
© 岡崎京子 / 祥伝社フィールコミックス

企画展	水上勉のハローワーク 働くことと生きること 開催中～12月21日(日)	第34回 世田谷の書展 2015年1月6日(火) ～1月21日(水)	岡崎京子展 戦場のガールズ・ライフ 2015年1月24日(土)～3月31日(火)
12月	2015年1月	2月	3月
コレクション展	下北沢クロニクル 開催中～2015年4月5日(日)		

コレクション展

「下北沢クロニクル」

開催中～2015年4月5日(日)
1階展示室

観覧料:一般200(160)円 高校・大学生150(120)円
小・中学生100(80)円 65歳以上・障害者100(80)円
* 中学生以下は土・祝・日は無料 *()内は20名以上の団体料金



休館日:
毎週月曜日(ただし月曜日が休日の場合には開館し、翌平日休館)
年末年始(12月29日～1月3日)

開館時間:
10時～18時
(ただし観覧会入場は
17時30分まで)

交通案内
京王線「芦花公園」駅
南口より徒歩5分
小田急線「千歳船橋」駅
より京王バス(千歳烏山
駅行)利用「芦花恒春園」
下車徒歩5分



公益財団法人せたがや文化財団

世田谷文学館 SETAGAYA LITERARY MUSEUM

〒157-0062 東京都世田谷区南烏山1-10-10
Tel. 03-5374-9111 Fax. 03-5374-9120
ホームページ <http://www.setabun.or.jp/>

せたがや文化財団の催し物

- 世田谷美術館 [Tel. 03-3415-6011]
- 難波田史男の世界 ～イメージの冒険～
2014年12月6日(土)～2015年2月8日(日)



難波田史男「トロンボンの行進曲」1967年、
世田谷美術館蔵

- 東宝スタジオ展 映画＝創造の現場
2015年2月21日(土)～4月19日(日)
- ミュージアム コレクションⅢ 世田谷に
住んだ東宝スタジオゆかりの作家たち
2015年1月4日(日)～4月12日(日)



久保一雄《小さな漁港》1959年、世田谷美術館蔵

- 世田谷美術館分館
向井潤吉アトリエ館
[Tel. 03-5450-9581]
- 向井潤吉と文学
一連載小説の挿絵と装幀を中心に
2014年12月20日(土)～2015年3月22日(日)
- 世田谷美術館分館
清川泰次記念ギャラリー
[Tel. 03-3416-1202]
- 清川泰次一線をめぐって
2014年12月20日(土)～2015年3月22日(日)
- 世田谷美術館分館
宮本三郎記念美術館
[Tel. 03-5483-3836]
- 開館10周年 宮本三郎の仕事1960's—
1970's 絢爛な色彩の神話世界へ
2014年12月20日(土)～2015年3月22日(日)

- 世田谷文化生活情報センター
世田谷パブリックシアター
[Tel. 03-5432-1526]

公演情報——
こまつ座&世田谷パブリックシアター
やぶはらけんぎょう

- 『戴原検校』
2015年2月23日(月)～3月20日(金)
世田谷パブリックシアター
作:井上ひさし 演出:栗山民也
出演:野村萬斎、中越典子、山西惇、
大鷹明良、酒向芳、春海四方、
明星真由美、家塚敦子、山崎薫、
辻萬長、千葉伸彦(ギター奏者)



『戴原検校』2012年公演 撮影:谷古宇正彦

- 世田谷文化生活情報センター
生活工房 [Tel. 03-5432-1543]

- 「羊と手
—衣服と作り手、その生き方」
2015年1月10日(土)
～2月15日(日)
生活工房ギャラリー
- 「ブナ帯 ☆ワンダーランド」展
2015年2月27日(金)
～3月16日(月)
生活工房ギャラリー ほか



「羊と手」

- 世田谷文化生活情報センター
音楽事業部 [Tel. 03-5432-1535]

- 異分野とのコラボレーション
「シェイクスピアと音楽
～描き出された女性たち～」
2015年2月1日(日) 15時開演
成城ホール
出演:
小田島雄志(お話/英文学者・
演劇評論家)
池辺晋一郎(お話/作曲家)
松崎謙二(朗読/無名塾) ほか 小田島雄志

